

アモキシシリン（AMPC）投与後の発疹についての前方視的調査

幸道直樹

【はじめに】AMPC は小児科領域では頻用される抗生剤の一つであるが，投与後の発疹出現の点から使いにくいという声も聞かれる。第 13 回近畿外来小児科学研究会（07/11/4）参加医師に対して AMPC に関連する発疹についてのアンケート調査では，発疹は 80%の人が経験し，その頻度は 1～5%と答えた人が 35%，1%以下が 31%であったが，10%以上との回答も 17%あった。

【目的】抗生剤（特に AMPC）投与後の発疹の頻度や性状を調査する。

【対象と方法】近畿外来小児科学研究会グループの医療機関において 2 年間にわたって，迅速検査で確定した 15 歳未満の溶連菌感染性咽頭炎を登録し，AMPC または他の抗生剤を投与後に観察された発疹について前方視的に検討した。

【結果】登録された症例数は 1,245 症例（男児 707 例，女児 538 例）。抗生剤投与後に発疹が観察された症例は 32 例で，AMPC 群 580 例中 18 例（3.1%），セフェム系群 275 例中 9 例（3.2%），PCG 群 325 例中 3 例（0.9%），その他 64 例中 2 例（3.1%）であり，PCG 群が他の 3 群に比較して有意に低かった。発疹は 76%で抗生剤投与中に出現していたが，24%では投与終了後に観察された。発疹の性状は，セフェム系群，PCG 群の多くは軽症であったが，AMPC 群では多型紅斑型，湿疹型，固定薬疹様など多彩な傾向にあった。ワイドシリン投与後に多型紅斑型発疹が強く出現した症例は，後にウイルス感染併発が示唆された。

【考察】特に AMPC 群での発疹出現について調査したが，むしろ対照群の 1 つである PCG 群の発疹出現率が低い結果で，AMPC 群はセフェム系群と同頻度であった。AMPC 群での発疹性状が他の群に比して多彩であることが，小児科医にとって発疹出現頻度が多い印象を与えていると考えられた。